

アリー・アブド・アツ・ラテイーフの生涯

——スーダン「一九二四年革命」の社会的背景分析の素材として——（下）

栗田 禎子

〔上（第百五十九冊掲載）の構成〕

はじめに

一 ハンダクという町

二 ワーディー・ハルファー

三 ハルトウームへ

四 アーツザ

五 若い将校

アリー・アブド・アツ・ラテイーフの生涯

六 政治活動の開始

一九二二年、アリー・アブド・アツ・ラティーフは将来を約束された若い将校としての経歴に終止符を打ち、激動の中に身を投じていくことになる。この年、ワド・マダニーで、イギリス人の上官とアリーの間には衝突が生じた。衝突の原因は一説によれば、街頭で両者が遭遇した際、アリーがしかるべき形で敬礼するのを怠ったことだとされる。(ちなみに当時、スーダン人軍人がイギリス人の上官と出会った際は、たとえば騎乗している場合は下馬することが求められた。) 結果としてアリーは停職処分を受け、ハルトゥームに召喚された。⁵⁴⁾

英人上官への敬礼拒否という行動は、実は、一九一九年革命当時のエジプト人将校たちの間でも見られたものである。(スーダンでアリーと親交があったムハンマド・ナジブも、一九一九年に革命に参加するために急遽エジプトに帰国した際、カイロ駅頭で同じ行動をとっている⁵⁵⁾) アリーがエジプトの新聞を読み、当時の域内の状況に精通していたことを想起すると、停職処分の原因となつたとされるアリーのこの行動は、単なる個人的・衝動的なものではなく、おそらくはきわめて政治的・意識的なものだったと考えられる。

ハルトゥームに召喚されたアリーは、暫定的にオムドゥルマーンの第九大隊に配属されていたが、この期間中に再び政治的行動をとることになる。一九二二年春、アリーは自らが署名した「スーダン国民の要求 Matālib al-Umma al-Sūdāniya」なる文書を『スーダン文明 Hadāra al-Sūdān』紙の事務所に持参し、掲載を要求した。だが編集長は掲載に消極的であり、のみならず文書は結果的にスーダン政庁(英当局)の手に落ちて、アリーは逮捕された。アリーは

六月一四日に裁判にかけられ、反政府的・煽動的な文書を流布しようとしたという罪状で軍籍を剥奪され、一年間投獄された。⁽⁸⁶⁾

「スーダン国民の要求」という文書は、(一) スーダンが独立段階に達するまでの間、導き手が必要とすることは事実だが、この導き手を選ぶ権利があるのはスーダン国民だけであることを強調した上で、(二) 教育の拡大、砂糖の専売制の廃止、スーダン人官吏をより上位のポストに登用すること、ゲジラ計画（英主導の一大綿花プランテーション）の見直し、等の一連の要求を列挙したものだと言われる。⁽⁸⁷⁾ この文書にはまた、英当局への忠誠を表明している宗教的・部族的名望家層（特に名指しされていたのはハトミーヤ教団長のサイイド・アリー・アル・ミールガニー al-Sayyid 'Ali al-Mirghani）に対する批判も含まれており、これらの名士たちは「彼ら自身しか代表していない」ことが指摘されていたという。⁽⁸⁸⁾ この文書はアリー一人人によって起草・提出されたものではなく、背後には彼のこの行動を支持する一群の人々が存在したようであるが、⁽⁸⁹⁾ ではこのグループの性格に関してはどうのような点が指摘できるだろうか。

第一に指摘できるのは、このグループの原型は、少なくとも部分的には、アリーがワド・マダニー滞在中に作り始めた将校組織に遡ると思われるということである。⁽⁹⁰⁾（もつとも妻アーツザの回想によれば、アリーはもつと早く、まだ南部にいた頃にも何らかの「会合」を開いていた形跡があるが。）⁽⁹¹⁾ この組織は当初は、明確な目標を持つ政治組織というよりは、各地に散らばったスーダン人将校たちを束ねる全国的な互助組織的なものとして構想されていたようである。⁽⁹²⁾（ちなみにアリーは——正確な時期は不明だが——将校の未亡人たちのための全国的組織を結成することを計画していたとも言われる。⁽⁹³⁾ もしこれが、将校夫人たちによる互助組織のようなものとして構想されていたとすれば、

その指導者として念頭に置かれていたのはアーツザだったのかもしれない。

第二に注目に値するのは、国民の一体性に基く全国的な組織を建設していくための前提として、「部族」の違いを克服しようとする意識的な努力が行なわれた形跡があるということである。アリーがワド・マダニーで結成した組織は、スーダンのさまざまな部族間の協力と団結をめざすものだったと言われる。⁶³ 英当局は、アリーは「スーダン部族統一同盟 Sudan United Tribes Society」と呼ばれる組織の代表として行動している、という情報を得ていた。⁶⁴

第三に、まさにこの国民の一体性に対するこだわりという点で、このグループはある程度まで、一九二〇年頃に結成された「スーダン統一同盟 Jan'ya al-Itihād al-Sūdānī」の、特に草の根のメンバーたちと重なり合う側面を持つ。「スーダン統一同盟」はエジプトの一九一九年革命に刺激され、イギリス支配への対抗をめざして結成された秘密組織であるが、ここでは、指導的メンバーにとつては「統一」がエジプトとスーダンの統一を意味するのは自明だったのに対し、草の根のメンバーの中には「統一」をスーダン国民内部の統一と解釈する者がいる、という状況が存在していたとされる。⁶⁵ (すぐ後で見えるようにアリーの行動様式にもエジプトにおける反帝国主義闘争の影響は濃厚なのであるが) 一方で彼が、運動の前提としてスーダン国民内部の統一をまず重視する、「統一同盟」の指導部よりは草の根に近い立場をとっていたことは興味深い。——以上からは、アリーとその盟友たちが当時抱いていた「スーダン民族主義」の、おおよそその特徴が浮かび上がる。

「スーダン国民の要求」提出、そしてそれ以後のアリーの行動様式は、アリー(およびその背後に控えていたグループ)が(ワド・マダニーでの英人上官との衝突事件の場合同様)エジプトで展開されてきた反帝国主義闘争の経験からインスピレーションを得ていたことを明白に示すものとなった。逮捕後の取調べの過程で、アリーはエジプトから

弁護士を呼び寄せて弁護してもらうことを要求し、却下されている⁽⁶⁶⁾。植民地支配当局に対して「国民の要求」を公然と突きつけることで運動を開始するという手法自体が、エジプトで一九一九年革命に先立ってサアド・ザグルール Sa'ad Zaghlul とその盟友たちがとった同様の行動（英高等弁務官との一九一八年一月一日の有名な会見）にヒントを得たものだった可能性がある。エジプトの『アフバール』紙には一九二三年一月、（当時ハルトゥーム・ノースのコーベル監獄 Kober で服役中だった）アリーからの投稿とされる手紙が掲載されたが、そこでは彼は記念すべき一月一三日という日にちなんでもエジプト国民に挨拶を送り、獄中にある自分の運命を流刑中のサアド・ザグルールのそれとなぞらえている⁽⁶⁷⁾。

「スーダン国民の要求」の提出とそれに続く裁判・投獄——この年に生まれた次女スイットナー Situna は家族の中では「スジューン Sujun（牢屋）」というあだ名で呼ばれるようになった⁽⁶⁸⁾——は、アリーの人生の転換点であり、これにより彼は国民的注目を集める人物となった。一九二三年四月の出獄後アリーの政治的影響力が増大した結果、彼の掲げるタイプの「スーダン民族主義」のヴィジョンが、「スーダン統一同盟」の既存の指導部のヴィジョンを脅かすという現象さえ生じることになったことは、次のようなエピソードからも窺える。それによれば、「スーダン統一同盟」の指導的メンバーのひとりだったスライマーン・キシヤ Sulāyman Kisha が、預言者ムハンマド生誕祭の夕べに朗唱された詩を集めて本の形で出版し、序言の冒頭に「高貴なアラブの民よ（シャアブ・アラビー・カリーム shāb 'Arabī karīm）」と書いたところ、アリー・アブド・アッ・ラティーフが抗議して来た。「高貴なスーダンの民よ（シャアブ・スーターニー・カリーム shāb Sūdānī karīm）」と書くべきだ、スーダン内部でアラブと南部の人々の間に分け隔てがならないから、というのが、彼の言い分であった⁽⁶⁹⁾。

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

アリーの影響力が増大したのは明らかに、彼の掲げるタイプの「スーダン民族主義」が、「脱部族化」しつつあった当時のスーダン社会の現実と良く合致していたからであった。この社会的現実が新しいタイプの「スーダン民族主義」を、また、新しいタイプの政治指導者を求めていたのである。

七 「指導者（ザイーム）」アリー・アブド・アツ・ラティーフ

第一次大戦終結以来スーダンで高まり始めていた反帝国主義的気運は、一九二四年春の「白旗同盟 Jam'iya al-Iwa' al-Abyad」の結成をもって新たな段階を迎えた。この組織の基本的な発想は、(1) スーダン国内の民衆的勢力と(2) エジプト、との間で共闘関係を築き、それによってイギリス支配からの解放をめざすというものであった。「スーダン民族主義」の大義と、「ナイル河谷（＝エジプト・スーダン）の統一」の大義の共存は、一見奇妙な印象を与えるかもしれないが、一九一九革命後の当時のエジプトが域内における反帝国主義闘争の前衛とも言える位置にあったこと、さらに一九二三年末の選挙での圧勝の結果、エジプトではサアド・ザグルール率いるワフド政権が成立したことを考えると、これは理解可能な戦略であった。

折りしもイギリス政府とサアド・ザグルールの間ではスーダンの将来のステータスをめぐる交渉が開始されようとしており、スーダン国内ではスーダン政庁によって動員された宗教的・部族的名望家層がイギリスへの忠誠を表明していた。これに対抗するにはもはや地下活動では不十分であり、すぐに公然闘争に打って出る必要があるという認識は、「スーダン統一同盟」のメンバーの一部を含む）多くの人々によって共有されていたようだが、誰が責任を負う

のかという点になると、当然のことながら躊躇する者が多かった。まさにこの時点で、アリー・アブド・アッ・ラティーフがその役割を引き受けたのである。同志のひとり、アリーの自宅で開かれた会合の席上、この決定が下されたときのことを回想している。⁽⁷⁰⁾それによるとアリーは、出席者らに対して次のように発言した。

「我々がこの会議を開いているのは、今まさに、交渉〔英Ⅱエジプト交渉〕が始まろうとしているからだ。この交渉に関して、サイド・アブド・アッ・ラフマーン〔Ⅱマフディーの遺児〕は既に会合を開いて彼の意見を表明した。だが、我々は、ナズィル nazir (部族長)、ウムダ unda (村長)、シャイフ shaykh (長老、村役人) といった人々が我々を代表しているとは思わない。我々もまた、この問題について意見を持つているからだ。」⁽⁷¹⁾

そして彼は、確定したメンバーとリーダーを持つ組織を結成することで、公然闘争に乗り出すべきだと提案した。出席者は原則的には賛成したが、敢えて責任を負おうとする者は誰もいなかったため、議論は延々と続いた。深夜になっても何も決まらず、会議は失敗に終わるかと思われた時、アリーは言った。

「諸君、もう充分だ。もうそろそろ二時だ。真夜中だ。会議はやめにしなければならぬ。——みんなの中で一番高貴なわけではないが、私が同盟長になるといっはどうか？ 私が責任を引き受けて、白旗同盟の長になるといっはどうか？」

出席者たち〔その中には部族有力者の子弟、ウムダやナズィルの息子たちも含まれていた〕は即座に賛同し、こうして白旗同盟が正式に結成された。⁽⁷²⁾

その後の「一九二四年革命」の展開に関しては、既に別稿でも検討した。ここでは、運動の中でアリーが果たした役割をめぐって、いくつかの指摘をするにとどめておこう。

第一に、これまで一部の論者の間には「一九二四年革命」によるアリーの役割を過小評価し、アリーは旗印にすぎなかったのであって運動の真のリーダーはウバイド・ハーツジ・アル・アミンだった、とする傾向が存在した。これらの論者によれば、アリーは南部出身だったがゆえに、運動が北部スーダンだけに限られたものではないことを対外的に示すため、名目的な長に選ばれたにすぎないのだという。²³⁾ しかしながらこの見解は、正しいとは言えない。ウバイド・ハーツジ・アル・アミンが——たとえば前出のスライマーン・キシヤと比べた場合——「スーダン統一同盟」指導部内における、より革新的な潮流を代表していたと思われることは事実である。一九二三年末に「スーダン統一同盟」の分裂とそれに伴う「白旗同盟」の原型の形成という事態が進行する過程で、ウバイド・ハーツジ・アル・アミンのアリーに対する支持が重要な意味を持ったことは否定できない。しかし、その過程においてさえも、運動の性格の変容を引き起こした原動力はウバイドではなくアリー（および——後述のように——その背後にあった社会勢力）だったのであって、アリーを指導力や決定権のない「名目的」リーダーとして片付けることはできない。先に引用した会合の席におけるアリーの言動は、彼が実際にイニシアティヴを握っていたことを示している。

同時に、アリーは単に勇気があっただけではなく、自らの政治的目的についてきわめて明確なヴィジョンを有していたと思われることも指摘しておく必要がある。アリーは政治的著述家としても組織者としても有能であった。何と言っても彼が当時のスーダン社会を代表する知識人のひとりだったことを忘れてはならない。「白旗同盟」結成直前の時期、アリーはエジプトの著述家アブド・アッ・ラフマーン・アッ・ラーファイイー 'Abd al-Rahmān al-Rāfi'ī の『民族的諸結社の歴史 [Tarīkh al-Jam'iyāt al-Wataniya]』といった書物を通じて、さまざまな国における民族運動および政治運動全般の経験を学んでいた形跡がある。²⁴⁾ 「一九二四年革命」の過程を通じてアリーの名前で発表された文書類の

ほとんどは、実際にアリー自身によって書かれたものようである。⁽²⁵⁾ これらの大半は電報や短い書簡にすぎないが、その語法は、アリーがスーダンにおける英統治の性格に関して鋭い洞察を有しており、かつ自分の見解を説得力ある形で表現することを知っていたことを示している。また、「白旗同盟」への参加希望者は多くの場合、入会前にアリーによる面接を受けたようである。⁽²⁶⁾ 英当局はのちにアリーのことを、「エジプト人の共謀者たちから」政治的テクニクを習得した、「危険で執念ぶかく、繊細な煽動者」と評している。⁽²⁷⁾ アリーは一九二四年七月上旬に逮捕・拘留されたのちも外界との一定の接触を保ったようであり、たとえば同八月にポート・スーダンで革命運動が高揚を見せた際には、ハルトウム・ノースのコーベル監獄の獄中からメッセージを送っている。⁽²⁸⁾

第二に指摘しておかねばならないのは、アリーの発揮した指導力は彼の資質や能力だけに起因するものではなく、少なくともある程度までは、オムドウルマン、ハルトウム、ハルトウム・ノース等の街頭における民衆の支持に依拠していたと考えられることである。これは彼が特殊なタイプの「エフェンディーヤ」（官吏・軍将校）——すなわち南部・ヌバ山地にルーツを持つ「エフェンディーヤ」——であり、植民地行政の末端を担うと共に、都市下層民ともきわめて密接な絆を持つ存在だったことと関係している。そしてこれは、ウバイド・ハーツジ・アル・アミーンにはない側面であった。アリーは特殊なタイプの「エフェンディーヤ」に属していたがゆえに二つの異なる社会勢力（「エフェンディーヤ」と都市下層民）をつなぐ存在たり得たのであり、これにより、それまでのスーダン社会には全くなかったタイプの、独特のリーダーシップを形成していたと言えるのである。そしてこの事実は——先に引用した会合の席での発言から窺えるように——アリー自身によって意識されていたようである。「スーダン国民の要求」の起草・提出事件の頃から既に、彼のたたいは二つの面を持っていた。主要モチーフは言うまでもなく、

イギリス植民地支配に対するたたかいであった。だが、もうひとつの隠されたモチーフも存在しており、それは、宗教的・部族的名望家層に対するたたかいだっただのである。これらの名士たちは「彼ら自身しか代表していない」という指摘は既に「スーダン国民の要求」の中に見られたが、一九二四年段階になるとこの認識は、さらに率直に表現されるようになった。「我々もまた、この問題について意見を持っている」、あるいは「みんなの中で一番高貴なわけではないが、私が同盟長になるというのはどうだろう」といったアリーのことばには、「エフエンディーヤ」一般としての静かな誇りと同時に、下層民衆の支持を得ている「脱部族化した黒人」出身「エフエンディーヤ」としての挑戦的感情が感じとれる。そして、この挑戦の意味・重要性は、アリーの敵対者たちの側によってもすばやく察知された。六月二三日のデモ（これは「白旗同盟」によって公式に組織された最初のデモであった）の直後、『スーダン文明』紙にある投書が載ったが、この投書の者は以下のような表現で、「街の下層民ども」（文字通りには「街路の子ら *awlād al-shawāri*」）を激しく攻撃していた。

「社会において何の地位も占めていない、最もつまらぬ者たち、最も卑しい者たちが国民の意見を代弁しているふりをしたことで、この国は辱められた。」

「人民は部族（カビーラ *qabīla*、バトン *batn*、アシーラ *ashīra*）に分かたれており、そのそれぞれに長（ライース *ra'īs*、ゼーム *za'im*、シャイフ *shaykh*）がいる。国政について語る権利を持っているのは、この人々なのである。」
 「最近有名になったアリー・アブド・アッ・ラティーフとやらは、いったいどの部族に属しているのだ？」⁽²⁶⁾

この投書からは、アリーに敵対者する人々（宗教的・部族的名望家層、およびおそらくは、これらの名望家層の指導を受け入れる用意があった一部の商人・「エフエンディーヤ」層）の怒りが生々しく伝わってくる。⁽²⁶⁾明らかに、アリー

の敵対者たちは、争われているのは単なる一結社の長の地位ではなく、国民全体に対する指導権の問題なのだということをよく理解していた。実際、アリーは今や、「スーダン国民」全体の指導者（ザイーム *za'im*）の地位に近づきつつあったのである。

アリーに関してエジプトで一九五〇年に出版された評伝に『ザイーム（指導者）アリー・アブド・アッ・ラティーフ』（*al-Zaim 'Ali' Abd al-Latif*）というタイトルのものがあるが、この「ザイーム」という概念が、近代エジプト政治史の文脈では特別な重みを持つものであることに注意しておいても良いだろう。一九一九年革命以後のエジプト政治において「ザイーム」と言えば、それは何を指してもワフドのリーダー（サアド・ザグルール、ついでムスタファー・ナッハース）のことを指すが、この場合の「ワフド」は単なる一政党ではなく、文字通り「代表団 *wafd*」、すなわちエジプト国民全体の代表である。その「ワフド」のリーダーたる「ザイーム」も、当然、単なる一政党の長ではなく、全国民の指導者である。「ザイーム」は、国民の代表、国民統合の象徴であり、大衆の意思を誰よりも良く察知・体現し、運動を常に正しい方向に導いていく者、大衆の支持に裏付けられているがゆえにほとんど無誤謬の存在としてイメージされることになるのである。⁽²⁾ この評伝の著者がタイトルにアリーを「ザイーム（指導者）」と形容することで、このようなニュアンスを喚起しようとしているのは興味深い。だが、それ以上に興味深いのは、「一九二四年革命」の実際の展開過程自体において、アリー・アブド・アッ・ラティーフとサアド・ザグルールのイメージが重ね合わされる局面があったということである。

一九二四年に行なわれたデモにおいて最も一般的に用いられたスローガンは、「エジプトとスーダンの王ファード万歳」「サアド・ザグルール万歳」といったものであった。しかしながらこれらのスローガンと並んで、「アリー・

アブド・アツ・ラティーフ万歳！自由スーダン万歳！」アリー・アブド・アツ・ラティーフ万歳！サアド・パシャ・ザグルール万歳！」といったスローガンも、特にハルトゥームとオムドゥルマーンで行なわれたデモの際には叫ばれた。⁽⁸³⁾

また、八月九日に起きた陸軍士官学校学生による武装デモの際には、明らかにアリーに焦点を合わせる形で運動を展開しようとする傾向が観察され、デモ隊はまずアリーの自宅に立ち寄って妻アーツザに挨拶を送り、ついでハルトゥーム・ノースのコーベル監獄に赴いてアリーとの面会を要求した。⁽⁸⁴⁾この場合、アリーの自宅はザグルールの家（＝「国民の家 bayt al-umma」）に、アーツザは、ザグルールの妻（＝「エジプト国民の母 umm al-Misryin」）になぞらえられていた。⁽⁸⁵⁾既に見たように、エジプトの一九一九年革命からインスピレーションを得る形で運動を展開しようとする傾向は、第一次大戦後のスーダンにおける反帝国主義闘争の中に常に存在したが、この傾向はここに至って頂点に達したと言える。

さらに重要なのは、アリーを「サイーム」と見なし、その名をサアド・ザグルールの名と並んで連呼するという行動様式は、（白旗同盟によって公式に組織された）六月二三日のデモ、あるいは（エジプト軍と何らかの形で連携していたことが推測される）陸軍士官学校生のデモにおいてだけではなく、オムドゥルマーンやハルトゥームで自然発生的に起きた民衆のデモにおいても見られたということである。六月二三日以降（これはすなわち英当局によってデモ禁止命令が出され、白旗同盟がデモを組織するのをやめることを決定した後になるが）に、「大工や仕立屋」といった人々、特に「若者たち」によって行なわれたデモの過程では、アリー・アブド・アツ・ラティーフの名が絶え間なく連呼された。⁽⁸⁶⁾これは、白旗同盟の指導部が全体としては「合法的・平和的」な闘争という原則（それはイギリスと

の間で進行中の交渉においてエジプト政府の立場を不利にしないために案出されたものであった)に縛られ、次第に大衆から遊離しつつある状況下でも、アリーだけは街頭の民衆との絆を維持していたことを示している。その意味で彼は真の「ザイーム」だったのであり、またまさにそれゆえに、スーダン政庁はアリーをより厳しい監視下に置いたため、その身柄をコーベル監獄から英軍司令部へと移すことを余儀なくされた。⁽⁸⁷⁾

アリーは女性に対して正面から政治を語ることはなかったため、アーツザはこの時まで、夫の政治的活動の内容に関知してはいなかった。(南部勤務時代以来、自宅で何らかの「会合」が開かれていることはむろん知ってはいたが)。また、自ら運動に加わりうと考えたことも全くなかったという。⁽⁸⁸⁾しかしながら「一九二四年革命」の展開過程で、彼女の心理状態も明らかに変わっていく。ある時アーツザは道でデモ隊に出くわし、何事かと訊いてみたところ、人々から返ってきた答えは「これが何だか知らないのか?君の家から起きた革命だよ!」というものだった。⁽⁸⁹⁾彼女はまた、デモの中で夫の名が連呼されるのを耳にしてもいた。ある日、家の前をデモ隊が通りかかると、彼女の母ファアティマはこれに対し「ザガリード zagharid」(「女性が祝福のために喉を鳴らして上げる独特の歓声」)を送った。アーツザが驚き、「この人たちは監獄行きよ。どうしてザガリードなんかするの?」と言うと、母親は落ち着き払って、「勇気づけてやるのさ」と答えた。これを聞いた時、アーツザは急に「自分はひとりではない」と感じ、「身体が大きくなつたような、何ともいえない感覚」を味わった。そのまま彼女は家の外に出てデモに加わり、結果として、この種の近代的政治行動に参加する最初のスーダン人女性のひとりとなった。⁽⁹⁰⁾(これは印象的なエピソードであるが、同時に興味深いのは、アーツザとその母ファアティマの態度の違いかもしれない。将校という特権的エリート階級に属していたことがある男の妻であるアーツザが当然のことながら——少なくとも当初は——政治活動への参加をためらい、慎

重だつたのに対し、マフデー運動以来の激動期を生き抜いてきたスーダン人女性である母親は、恐れを知らない態度を示している。ファータイマはのちに英当局が家宅捜査に来た際にも、これに抵抗してイギリス人官吏を殴打するという武勇談を残している。⁽⁹¹⁾

アーツザはデモに参加するだけでなく、夫の秘密書類の保存・処分という重要な作業にも(ウバイド・ハーツジ・アル・アミンと連絡をとりつつ)関与するようになった。自宅は何度となく家宅捜査の対象となり、英当局はこの反逆者の家族への制裁として水や照明を断つという処置をとるに至つた。⁽⁹²⁾

八 「発狂」の噂

アリー・アブド・アッ・ラティーフが逮捕されたのは一九二四年七月四日、同志の一人を訪ねる途上の、路面電車の駅頭においてのことであつた。⁽⁹³⁾一週間後、デモ煽動の罪状で、三年間の懲役という判決が下つた。ついで「一九二四年革命」の敗北後、一九二五年四月にアリーは再度裁判にかけられ、煽動的文書所持の罪状で七年間の懲役判決を受けたので、服役期間は計一〇年となつた。⁽⁹⁴⁾だが、一九三四年の春が来た時、アリーは釈放されなかつた。なぜこのようなことが起きたのだろうか。

流布している説明は、アリーは(一九二七年に移送された)バフル・アル・ガザール州のワウの監獄で服役中に精神に変調をきたしたため、刑期の終了後も出所できなかつた、というものである。しかしながら、これは実際の経緯とは異なっている。

ワウの監獄で服役中に、アリーが英当局の目に「エキセントリック」もしくは「正常ではない」と映ることがあったことは事実のようである。それゆえ、刑期満了が近づくと、当局はクルックシャンク Crickshank という医師にアリーの診察を命じた。結果は、しかしながら、当局を失望させるものであった。医師は、「狂気の兆候は見当たらない」と報告した。⁽⁹⁵⁾ それゆえアリーは——英当局の目には「正常でないことは疑いない」と映っていたにせよ——正気だったのである。(おそらく当時の世界にあってイギリス帝国主義を打ち負かすことができると考えるような者は、英当局にしてみれば「正常」ではなかったのであろうが。)

アリーが正気であることが証明されたために、英当局は深刻な問題に直面することになった。法的には、アリーは釈放されねばならなかった。だが、彼をどこに住ませるか？ 当時のスーダンでとられていた公式の政策（それはまさに「一九二四年革命」後に英当局によって強力に推進されることとなった「原住民自治 native administration」政策であった）に従えば、人はみな自らの「部族的故地 tribal home」に属するものとされた。しかし、「脱部族化」した分子の典型ともいえるアリー・アブド・アツ・ラティーフの場合には、この原則はうまく機能しなかった。当局は、アリーは主としてハルトゥームで育ち、家族もそこにいること、「それゆえ、アリー・アブド・アツ・ラティーフの「故地」はハルトゥームだとも言える」ことを知っていた。だが、彼がハルトゥームに住むことを許すわけにはいかなかった。この男は「危険で執念ぶかく、繊細な煽動者」であり、彼が選りに選って首都ハルトゥームで暮らすことになれば、「大変な害」をなすことが予想された。⁽⁹⁶⁾ ついで英当局は、ほんの一時ではあるが、アリーをヌバ山地に住ませる可能性を検討した。興味深いことに、ヌバ山地のジャバル・リマ Jabal Lima で暮らしたい、というのはアリー自身が表明した希望であり、アリーはそこに家作を持っていると話していた。この案は一見、良いアイデア

であった。英当局によれば、アリーは「いかに脱部族化しているとはいえず、…スバ山地の出身」であり、そのスバ山地への「帰還」は「原住民自治」の原則と合致したものと考えられた。⁽⁹⁷⁾しかし、(スバ山地の治安状況に責任を負う立場にあった)コルドフアン州の知事は、この案に猛反対した。彼は政務官事務所に対し、スバ山地西部地域 Western Jebels の地区行政官からの報告書を転送したが、この報告書によれば、リマはミリ Mii の部分を成す住民集団であり、そのミリはと言えば、スバ山地の中でも最も政治的な意識の強い人々であった。地区行政官の指摘によれば、ジャバル・リマはアリー・アブド・アッ・ラティーフにとって、「反政府キャンペーンを開始するために絶好の場所」となってしまう危険性があった。⁽⁹⁸⁾結果的に、アリーを釈放するという案は完全に放棄された。

ワウの監獄で服役していた時期のアリーをめぐることは、彼は同房の囚人によってバケツで頭部を強打されたために実際に精神に変調をきたしたのだ、という噂も存在する。⁽⁹⁹⁾

長い年月を経た現在では、この事件がどのような状況で生じたのかを確かめることは難しい。アリーを殴ったのは、ムハンマド・アブド・アル・バヒート Muhammad 'Abd al-Bakhit という(やはり「一九二四年革命」に参加した)南部出身の将校だった。ムハンマド・アブド・アル・バヒート自身によれば、これは単なる事故であった。彼が房内で髭を剃っていたところ、背後から近づいてくるアリー・アブド・アッ・ラティーフの姿が鏡に映った。危険を感じたため、とっさにバケツを掴んでアリーを殴ったのだという。⁽¹⁰⁰⁾この人物が、なぜアリーが自分に危害を加えようとしていると感じたのかは分からない。ただ、狭い房内での拘禁生活の中で、たとえ同志の間であっても不快感と緊張が高まる場合があったであろうことは想像に難くない。

他方、エジプトの歴史家は、ムハンマド・アブド・アル・バヒートは英当局に雇われて獄中でアリーを襲撃したの

だという見方をとっている^(四)。これが事実かどうかは分からない。やはりワウ監獄に移送されたウバイド・ハーツジ・アル・アミンが一九三二年に死亡した際にも、ウバイドは表面上は熱病で病死したことになるが、実は毒殺されたのだ、という噂が流れた^(五)。もしウバイドが本当に暗殺されたのだとすれば、理論的には、アリーに対しても獄中での暗殺が試みられてもおかしくはない。また、次のような可能性もある。もし当時ワウ監獄で英当局が反体制派を物理的に抹殺しようとしているという噂が流れており、かつ（アリーの終生の友であった）ウバイドもこの陰謀の犠牲者だったのだと信じられていたとすれば、ムハンマド・アブド・アル・バヒートによる殴打事件が生じた時、アリーが（あるいは当時ワウ監獄の獄中にあった人々全体が）これもまたイギリスの陰謀の一部だと信じたとしてもおかしくはない。いずれにせよ、重要なのは、この事件のあとでさえ、アリーの精神状態に目立った変化が生じた形跡はないということである。少なくとも一九三四年春の段階では、アリーは英当局の依頼で診断にあたった医師の目から見ても「正気」だったのである。にもかかわらず英当局は、これまで検証してきたような純然たる政治的理由で、彼を不当に拘留し続けた。一九三四年にアリーはワウからハルトウム・ノースのコーベル監獄へと移送され、首都圏に戻ってきたが、家族はその後三年間面会を許されなかった。その間に英当局の側は、アリーの精神状態は「公衆にとって危険」であるため釈放は不可能だ、という公式見解の流布に努めていた^(六)。

一九三七年、アリーの「いとこ」フサイン・リーハーンの息子ムハンマドは、アリーの次女のスイットナー（「スジュン」）と婚約し、結婚の許可を得るためにコーベル監獄のアリーを訪ねた。この時は面会が許された。アリーは完全に正常に見えた^(七)。

翌一九三八年、アリーは突然エジプトに移送された。

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

九 エジプトでの死

ムスタファー・ナッハース首相 Mustafa al-Nahās (ワフド党)率いるエジプト政府は前年以來、英当局にアリーの釈放を要求しており、アリーの移送は実はこの要求の結果であった。⁶⁶一九三六年にイギリスとワフド党の間で結ばれた「英・エジプト共同防衛条約」自体に表われているように、ナッハース内閣の政策は、イギリスに対し、迫り来る大戦での軍事協力を約束する見返りに、エジプトが一九二四年にスーダンで失ったものを回復することをめざすものであり、アリーの釈放はこの政策の成果のひとつだったと言うことができる。ナッハースは一九三七年六月にアリーの釈放をめぐる英当局との交渉を開始し、一月にはこの問題の解決にあたらせるため、エジプト人将校一名をスーダンに派遣している。

だが、依然としてイギリスへの従属下にあった当時のエジプト政府には、アリーのスーダン国内での釈放をかちとる力はなかった。スーダン国内での釈放は政治的騷擾の再燃につながる危険性があると考えられたため、英当局はアリーを秘密裏に国外に送り出すことを望んだのである。アリーの釈放とエジプトへの移送は、ある意味では、英当局にとって、(既に見たようにスーダン国内では釈放不可能な)この男をようやく厄介払いすることができるチャンスであり、好都合だったのだとも言える。

だが仮にアリーがエジプトで完全な行動の自由を与えられるようなことになれば、これまたイギリスの利益を大きく損なう危険性があったから、イギリスは当然のことながらこれにも反対した。そしてエジプト政府は、これに関し

でもイギリスに抵抗する力はなかった。(ナツハース率いるワフド党内閣は一九三七年一二月に倒れ、アリーの移送当時エジプトの政権の座にあったのは立憲自由党の保守内閣であったから、なおさらであった。) エジプト政府はアリーを釈放させはしたものの、彼を自由に行動させることはできなかった。折衷案として見出されたのが、アリーを精神病院に入院させるという解決法であった。⁽¹⁰⁶⁾

アリー・アブド・アッ・ラティーフは一九三八年五月、スーダンからエジプトに移送された。英当局はスーダンでもエジプトでも「彼の移送に伴っていかなるデモも起きないようにする」ことに神経を失らせていたため、移送は完全な秘密裏に、家族にさえ知らせることなしに行なわれた。⁽¹⁰⁷⁾ アリーを乗せた列車はハルトウムでもハルトウム・ノースでもなく、郊外のケダルー駅 *Kedaru* から出発した。⁽¹⁰⁸⁾ 旅行中もアリーは、これは危険な狂人の移送だという英当局の立場に基き、厳しい監視下に置かれた。「アリー・アブド・アッ・ラティーフは偏執狂的分裂症を患っており、…危険である」と当時のスーダン総督は書いている。「移送中は監視のために必要な措置がとられることになる。…警察による護送という形が最低限必要である。」⁽¹⁰⁹⁾ スーダン出国が秘密裏であったように、エジプト入国もまた、秘密裏であった。アリーはカイロではなくギザ駅で汽車を降ろされたが、これは民衆による歓迎のデモが起きるようなことを防ぐためであった。⁽¹¹⁰⁾

アリーはまず陸軍病院に入院させられ、ついでアッバースィーヤ地区の精神病院に移された。⁽¹¹¹⁾ 看護師はすべてエジプト人であり、待遇は良かった。エジプト王族の中でも親スーダンの傾向で知られるウマル・トゥースーン王子 *Umar Tusun* からは、差し入れの本が届いた。⁽¹¹²⁾ だが、外出することは許されなかった。八月になって、アーツザと(今やアリーの娘婿となった)ムハンマド・フサイン・リーハーンはエジプトを訪れ、病院でアリーと面会した。彼らの

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

見たところ、アリーはきわめて正常であった。⁽¹⁵⁾ 結果としてアーツザはエジプトの陸軍大臣に陳情を提出し、夫が退院して自由に暮らせるようにしてほしいと要求した。「夫にはいかなる病の兆候も見当たりませんでした」と、この陳情の中で彼女は書いている。「ただ一点、自分はまだ監獄に入れられている、スーダンの監獄とは少し違うかもしれないが、と信じ込んでいることを除けば」。だがエジプト政府の反応は、官僚的なものだった。アリーの退院は「彼の精神状態に鑑みて無理」だというのが、返って来た答えであった。⁽¹⁶⁾

アリーの晩年の精神状態に関しては、彼が時にエキセントリックに見える言動を示す場合があったことを示す証言も存在する。アーツザが病院で面会した際には、既に述べたように、アリーはきわめて正常に見えた。ただ、アリーはやはり面会に訪れていた見舞い客（エジプトに亡命中のスーダン人の元将校たち）に対し、ほとんど「予言」のよくな、確信に満ちた様子で、「スエズ運河はいつの日か戦場になる」と語っており、これがアーツザの注意を引いたという。だが、これは、アリーの軍事的・政治的洞察力を示すエピソードと言えるかもしれない。のちにスエズ運河地帯が実際に戦場となった時、アーツザは夫の予言が的中したと感じたという。⁽¹⁷⁾

一部の人は、しかし、もっと奇妙なエピソードを伝えてもいる。ザイン・アル・アーブデイン・アブド・アツ・ターム（「白旗同盟」における同志）がアリーとの面会後に友人に語ったところによれば、アリーは病院内にいた猫を指して、「これは本当の猫ではなく、イギリスが私を見張るために雇ったスパイだ」と言ったという。また、「私はムハンマド・アフマド・アル・マフディー（19世紀末にスーダンに現われた「マフディー」のこと）だ」と口にしたこともあるという。⁽¹⁸⁾

伝聞情報を過度に信用することはできないが、十数年間にわたる拘禁生活の結果、アリーの性癖にもともと存在し

た、神秘主義的傾向が増幅された可能性もあり得なくはない。また、長期にわたってプレッシャーにさらされ、狂人として扱われ続ければ、それだけで心理的バランスを失うには充分であろう。さらに、(アーンツァがエジプト当局への陳情の中で鋭く指摘したように) スーダン政庁の監獄からは釈放されたが、「病院」の姿をした別の監獄に入れられたにすぎないことに気づいた時、アリーが、絶望と精神的ショックを味わったとしても不思議ではない。

アリー・アブド・アッ・ラティーフは一九四八年一月二十九日に病死した。⁽¹⁷⁾

エピローグ

一九五二年七月、エジプトで革命が起きた。エジプト共和国の初代大統領に就任したムハンマド・ナジブは、アリーの遺体を、それまで埋葬されていた通常の墓地から、「愛国殉難者たちの墓地 *maqābir al-shuhadā'*」に移葬した。盛大な葬儀が行なわれ、アーンツァもスーダンから招待された。⁽¹⁸⁾ エジプト政府は「ナイル河谷の統一」を掲げた「白旗同盟」指導者の顕彰に努め、アーンツァに年金を支給した。⁽¹⁹⁾ (これは彼女が一九八七年に死去するまで支給され続けた。) スーダン本国では、アリーの名誉回復はもう少し時間を要した。しかし、独立(一九五六年)後、そして特にムハンマド・ジャアファル・ヌマイリー *Muhammad Ja'far al-Numayri* 率いる「自由将校団」による政権掌握(一九六九年五月)後は、この国民的英雄を顕彰しようとする試みが急に盛んになった。明らかにヌマイリーは、アリー・アブド・アッ・ラティーフという、スーダン社会における「近代的勢力」の先駆的存在であると共に、(のちに成立した諸政党のそれとは異なる)「スーダン民族主義」の体現者であった人物のイメージが、自身の「五月革命」体制の

ために利用可能であることを理解していたのである。

一九六九年、ヌマイリーは「一九二四年革命」参加者たちを顕彰し、アリーだけでなくアーンザにも勲章を授与した。一九七〇年、アリーは「中佐 nuqaddam」の位階に死後昇進した。^(註)

- 54 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-ʿAzza Muhammad ʿAbd Allāh のインタヴュー記録, p.374. Muhammad ʿAbd al-Rahīm, *al-Sirāʾ al-Musallih ʿala al-Mahāda fī al-Sūdān aw al-Haqīqa ʿan Hawādith 1924* (スーダンにおける統一をめぐる武装闘争、あるいは一九二四年の諸事件の真相), al-Qāhira, n.d., pp.11-12; Raʾat Ghannī al-Shaykh, *Misr wa al-Sūdān fī al-ʿAlaqāt al-Duwāliya* (国際関係におけるエジプトとスーダン), al-Qāhira, 1983, p.371.
- 55 Muhammad Najīb, *op.cit.*, pp.31-32
- 56 Sulaymān Kisha, *al-Liwāʾ al-ʿAbyad* (白旗同盟), al-Khartūm, 1957, p.4; *Sudan Monthly Intelligence Report* (以後、S.M.I.R.と略記), No.335 (June 1922).
- 57 S.M.I.R. No.334 (May 1922); *al-Akhhār*, 6 June, 1922; Jaʿfar Muhammad ʿAlī Bakīt, *al-Idāra al-Bartāniya wa al-Harakat al-Watāniya fī al-Sūdān 1919-1939* (スーダンにおける英統治と民族運動一九一九—一九三九年。以下、*al-Idāra*と略記), 1972, p.77.
- 58 *al-Akhhār*, 4 June, 1922.
- 59 Hasan Najīf, *Malāmih min al-Muḥammad al-Sūdānī* (スーダン社会の諸相), vol. I, pp.31-32.
- 60 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-ʿAzza Muhammad ʿAbd Allāh のインタヴュー記録, pp.373-374.
- 61 Sulaymān Kisha, *Muhākamat ʿAdāʾ al-Liwāʾ al-ʿAbyad* (白旗同盟員の裁判), al-Khartūm, n.d., pp. 5-7.
- 62 ムハンマド・フサイン・リーハーンはアリーの自宅を「将校未亡人同盟」(Jamʿiya Arāmil al-Dubbāʾ) なる組織の結成準備に

関する印刷物を目にしたことがあろう。Muhammad Husayn Rihānとの一九八六年二月一三日のインタビュー。

63 Ra'fat Ghanimī al-Shaykh, *op.cit.*, p.371.

64 S.M.I.R., No.335 (June 1922).

65 'Abd al-Karīm al-Sayyid はアリーはこの事件当時「スーダン統一同盟」に属しており、この組織の決定に基づいて行動していたとする。他方、(本文中で述べるように)「スーダン統一同盟」の指導的メンバーの一人であった Sulaymān Kisha は、これを否定している。'Abd al-Karīm al-Sayyid, *al-Liwa' al-Abyad : Ta'ribh Thawra 1924 : Muḥakimat wa Mushahadat Sajm* (白旗——一九二四年革命史・ある囚人の目撃談と回想), al-Khartūm, 1970, pp.9-10; Sulaymān Kisha, *al-Liwa' al-Abyad*, pp.4-6.

66 S.M.I.R., No.335 (June 1922).

67 *al-Akhhār*, 8 Jan. 1923.

68 次女の正式に登録された名前は「イフサーン」だったが、家族の中では「スイットナー」と呼ばれていた。ついで、アリーの投獄後、(アッザの母のファアティマ、もしくはアリーの父の再婚相手ラフマによって)「スジューン」と呼ばれるようになったらう。Dur'ya Muhammad Husayn との一九八六年二月七日のインタビュー。また、Muhammad Husayn Rihān との一九五五年三月十一日のインタビュー。

69 Sulaymān Kisha, *Siq al-Dhikrīyat* (鶏つ出の市), p.130; Hasan Najīa, *Malamiḥ min al-Mujāma' al-Sūdānī*, vol.1, pp.98-99.

70 *al-Riwayāt*, Vol.II 所収の 'Alī Mallāsī Hulāl のインタビュー記録, pp.302-319. 彼の証言の重要性を最初に指摘したものとして Khalid Husayn al-Kidd, "The Effendia and Concepts of Nationalism in the Sudan" (Reading 大学に一九八七年に提出された博士論文。未公開), p.66 がある。

71 *al-Riwayāt*, Vol.II 所収の 'Alī Mallāsī Hulāl のインタビュー記録, pp.306-307.

72 *Ibid.*, p.307.

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

- 73 ウバイド・ハーンジ・アル・アミーーン（その出自に関しては本稿「上」注13も参照のこと）が運動の真のリーダーだったとする主張は、Ja'far Muhammad 'Alī Bakhit, *al-Idāra*, p.78, また、'Engi'ibūtの歴史家ムハンマド・アニスによる Muhammad Anis, "Haraka al-Liwā' al-Abyad ba'da Khamis 'Am fi al-Sudan wa Misr" (白旗同盟運動から五〇年—スーダンとエジプトについて) (4), *al-Ahram*, 2 Jul.1973 などに見られる。
- 74 FO.371/10053, No.7895, p.82. (この英字局による報告書は「Tarih el Gama'at」として引用されている) 著書の正式名は、'Abd al-Rahmān al-Raḥī 'I, *al-Jam'iyyat al-Wataniyya : Sahifa min Tarih al-Nahdat al-Qawmiyya fi Faransa wa Amrika wa Almanya wa Batinnya wa al-Anadāl, al-Qāhira* (民族的諸結社—フランス、アメリカ、ドイツ、ポーランド、アナトリアにおける民族的覚醒の歴史からの一頁), 1922である。フランス革命から説き起こし、欧米諸国やオスマン帝国の近代政治史における「民族的結社」の役割を論じている。アリーはまた、アイルランドやバルカンにおける民族解放闘争の進展を強い関心を持ってフォローしていたと言われる。Mahjub 'Umar Bāsharī, *Ruwwād al-Fikr al-Sūdānī* (スーダンの思想的リーダーたち), al-Khartūm, 1981, p.208. Ja'far Muhammad 'Alī Bakhit は、'アリーはベルリンからアラビア語で書かれた共産主義文献（ドイツ滞在中のエジプト人学生組織によって発行されていた定期刊行物）を入手していたと主張している。Ja'far Muhammad 'Alī Bakhit, *Communist Activities in the Middle East Between 1919-1927 with Special Reference to Egypt and Sudan*, 2nd printed, Khartoum University Press, 1975, pp.6-7.
- 75 たとえばムハンマド・フサイン・リーハーンはアーッザによって保管されていた、アリーからサアド・ザグルールへの手紙を見たことがあるという。Muhammad Husayn Rihān との一九八六年二月一三日のインタビュー。
- 76 オムドウルマーンに住んでいた Shaykh 'Umar Da'f 'Allāh は「白旗同盟」のことを耳にした際、まずハルトゥームに行つてアリー・アブド・アッ・ラティーフと面談し、その上で組織への加入を決めた。ハルトゥームの国立文書館(NRO)所収 Misc. 1/18/211 Shaykh 'Umar Da'f 'Allāh, Tarih al-Haqā'iq : al-Juz' al-Thāni (真実の歴史), p.75. また、'当時シエンティーに住んでいた

- al-Tayyib Bābikr al-Minā' とも「白旗同盟」に加入する前にハルトウームに赴き、アリー・アブド・アッ・ラティーフと面談して、*al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-Shaykh al-Tayyib Bābikr インタヴュー記録, pp.336-337.
- 77 Kordofan 1/13/60, Letter from the Civil Secretary, 3 April, 1934.
- 78 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の 'Alī Mallāsī Hūlī のインタビュー記録, pp.311-313.
- 79 Ahmad Ibrahim Diyāb, *Thawra 1924 : Dirāsāt wa Maqā'ir* (一九二四年革命—研究と史実), al-Khartūm, p.32 に引用されている *Hadāra al-Sūdān*, 25 June, 1924. 「最もつまらぬ者たち、最も卑しい者たちが…」というくだりは、北部スーダンに存在するという「奴隷によって導かれる村はおしまいだ(サジヤム・アル・ヒッラ・アッ・ダリーラ・アブド)」ということわざを想起させる。このことわざについては、Khalid Husayn al-Kidd, *op.cit.*, p.137 参照。
- 80 この投書の筆者はスライマーン・キシヤだったと広く信じられている。
- 81 'Abd al-Hamid Ibrahim 'Abd al-Rahmān, *al-Za'im 'Alī 'Abd al-Latif*, al-Qāhira, 1950. 著者は「一九二四年革命」に参加したのちにエジプトに亡命したスーダン人将校の息子だった。この本には Musīfāt al-Nahās, 'Abd al-Rahmān al-Rafī 'i, Muhammad Sa'īh Harb 等のエジプトの政治家・著述家たちが序言を寄せている。
- 82 「一九一九年革命」以後のエジプト政治における「サイーム」概念の重要性に関しては、たとえば、'Abd al-Azīm Muhammad Rannādān, *Taiawwur al-Faraka al-Ma'āniya fi Misr min Sana 1937 'ilā Sana 1948* (エジプトにおける民族運動の発展一九三七—四八年), al-Qāhira, 1973, pp.91-94 を参照。
- 83 Saeed Moh. Ahmed el Mahdi (ed.), *op.cit.*, p.xxv; *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-'Azza Muhammad 'Abd Allāh のインタビュー記録, pp.384-385.
- 84 *al-Riwayāt*, Vol. I 所収の Ibrahim Sa'īd Uthman のインタビュー記録, pp.181-184.
- 85 アーンザを「エジプト国民の母」になぞらえる傾向の存在は、たとえば、一九二四年七月初旬にエジプトの女性組織がアーンザ

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

- ザに電報を送ったところ、事実からも窺える。Ahmad Ibrahim Diyāb, *op. cit.*, p. 48; S.M.I.R., No. 359 (June 1924).
- 86 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-ʿAzza Muhammad 'Abd Allāh のインタビュー記録, p. 387, p. 416.
- 87 *Ibid.*, p. 394. なお、この年に生まれた子どもがアリー・アブド・アッ・ラティーフにちなんで名づけられるという現象も存在したようである。Dr. 'Izz al-Dīn 'Amīr (スーダン共産党員の有名な活動家で一九八六～八九年には国会議員を務めた) は一九二四年秋に生まれたため、家族の中では「アブド・アッ・ラティーフ」と呼ばれていた。
- 88 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-ʿAzza Muhammad 'Abd Allāh のインタビュー記録, p. 379.
- 89 *Ibid.*, p. 385.
- 90 *Ibid.*, pp. 387-388.
- 91 Durrīya Muhammad Husayn との一九八六年二月七日のインタビュー。
- 92 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-ʿAzza Muhammad 'Abd Allāh のインタビュー記録, pp. 386-387, 409-410, p. 414.
- 93 S.M.I.R., No. 359 (June 1924).
- 94 S.M.I.R., No. 360 (July 1924) : F.O. 141/445/556 (1937) 所収の一九三七年九月二二日付報告書。
- 95 Kordofān 1/13/60, Letter from the Civil Secretary to the Governor of Kordofān, 3 April, 1934.
- 96 *Ibid.*
- 97 アリーの父親アブド・アッ・ラティーフはヌバ山地出身だったと言われるが、それ以上の詳細についてはアリーの家族は情報を持っていない。アリーがヌバ山地に所有していたという家作に関しては、軍務に就いた直後にヌバ山地に勤務した時期に入手したものである可能性もあると考えられる。孫娘の Durrīya は、しかしながら、アーンザが「ジャバル・リマ」に言及していたことをかすかに記憶してゐるであろうにも思うところ。Durrīya Muhammad Husayn との一九九五年二月一日のインタビュー。

- 98 Kordofan 1/13/60, Letter from the District Commissioner of the Western Jebels to the Governor of Kordofan.
- 99 Khadija Zuruq, *op. cit.*, p.36; Muhammad Najib, *op. cit.*, p.42.
- 100 Muhammad Adam Adham との一九八六年二月二七日のインタヴュー。同人によれば、これは Muhammad 'Abd al-Bakht 本人から直接聞いた話だと言う。
- 101 Muhammad Anis, "Haraka al-Liwa' al-Abyad ba da Khamisin 'Am fi al-Sudan wa Misr" (1), *al-Abram*, 29 Jun. 1973.
- 102 一九九五年五月四日付の *al-Khartum* 紙に掲載された Maha 'Abd Allah Hamd Hajj al-Amin 筆の記事。'Abd Allah Hamd Hajj al-Amin の家族との一九九五年七月二日カイロにおけるインタヴュー。
- 103 FO. 141/445/556 (1937) 所収の一九三七年九月二二日付報告書。
- 104 Muhammad Huseyn Khatun との一九八六年二月一〇日のインタヴュー。
- 105 'Abd al-Hamid Ibrahim 'Abd al-Rahman, *op. cit.*, p.92.
- 106 エジプト政府と英当局の交渉の詳細は FO.141/445/556 に見出される。また 'Abd al-Hamid Ibrahim 'Abd al-Rahman, *op. cit.*, pp.92-95 参照。
- 107 FO.141/445/556 所収の一九三七年一〇月七日付声明草案。
- 108 Muhammad Huseyn Khatun との一九八六年二月一三日のインタヴュー。
- 109 FO.141/445/556, Letter from the Governor-General of the Sudan to the British Ambassador in Cairo, 10 Dec.1937. Hasan Najla の *Malanih min al-Majma' al-Sudani*, vol.II, pp.32-36 には、アリーのエジプトへの移送をめぐる生々しい描写がある。それによれば汽車の中での食事の際、アリーはナイフやフォークを与えられず、この扱いに立腹していたという。これもまた「狂人の移送」に伴う措置だったのかもしれない。
- 110 'Abd al-Hamid Ibrahim 'Abd al-Rahman, *op. cit.*, p.96.

アリー・アブド・アッ・ラティーフの生涯

- 111 'Izz al-Dīn Ibrāhīm 'Abd al-Rahmān 將軍との一九八六年六月一八日カイロにおけるインタヴュー。(なお同氏は、前掲の *al-Za'im 'Alī 'Abd al-Latif* の著者 'Abd al-Hamid の兄弟である。)
- 112 Muhammad Husayn Kihān との一九八六年二月一三日のインタヴュー。
同インタヴュー。
- 114 al-'Azza Muhammad 'Abd Allāh からエジプト陸軍大臣への一九三八年一月二〇日付書簡。また一九三九年一月二五日に(エジプト陸軍大臣を経つて)転送されてきたエジプト保健大臣より al-'Azza Muhammad 'Abd Allāh への二月二日付書簡。これらの文書は Durīya Muhammad Husayn によって保管されている。
- 115 *al-Riwayāt*, Vol. II 所収の al-'Azza Muhammad 'Abd Allāh のインタヴュー記録, p. 406, pp.420-421.
- 116 'Izz al-Dīn Ibrāhīm 'Abd al-Rahmān 將軍との一九八六年六月一八日カイロにおけるインタヴュー。Hasan Najla の *Malamiyyin al-Mu'jamā' al-Sūdānī*, vol. II, p.35 にも、アリーがハルトウムからシェンデイーへの汽車の中で示した奇矯な言動への言及がある。それによりとアリーは異様に気が短く、また自分のことを「聖なる者」と名乗っていたという。
- 117 Muhammad Husayn Kihān との一九八六年二月一三日のインタヴュー。'Abd al-Hamid Ibrāhīm 'Abd al-Rahmān, *op. cit.*, p.102.
- 118 Muhammad Husayn Kihān との一九八六年二月一三日のインタヴュー。
- 119 同インタヴュー。
- 120 同インタヴュー。

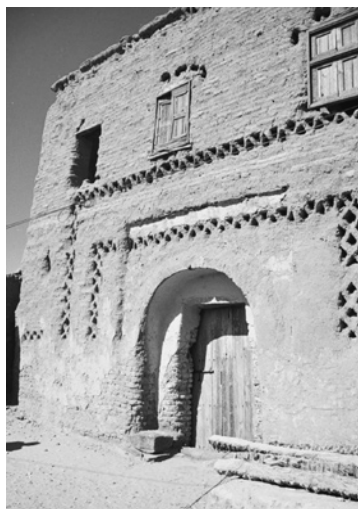


写真1 ハンダクの商人の家の遺構（「ハビール家」）（1995年3月筆者撮影）



写真2 ハンダクに残るインディゴ工場の跡（手前の部分）（1995年3月筆者撮影）

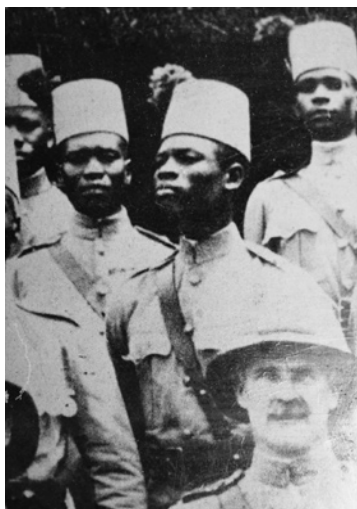


写真3 アリー・アブド・アッ・ラティーフ（ヌバ山地のタロディ駐屯時代のもの。
Durrīya Muḥammad Ḥusayn Rīḥān 所蔵）

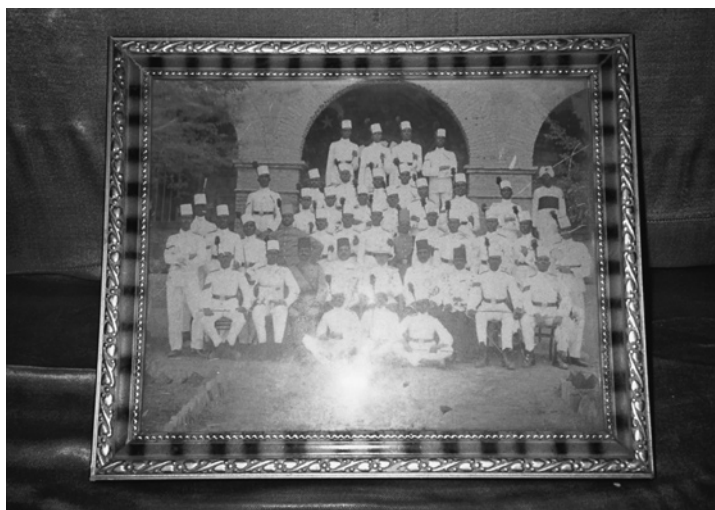


写真4 陸軍士官学校時代のアリー・アブド・アッ・ラティーフ（最後列右端。
Durrīya Muḥammad Ḥusayn Rīḥān 所蔵）



写真5 アリー・アブド・アッ・ラティーフの少尉任官時（1914年）の証書（Durrīya Muḥammad Ḥusayn Rīḥān 所蔵）

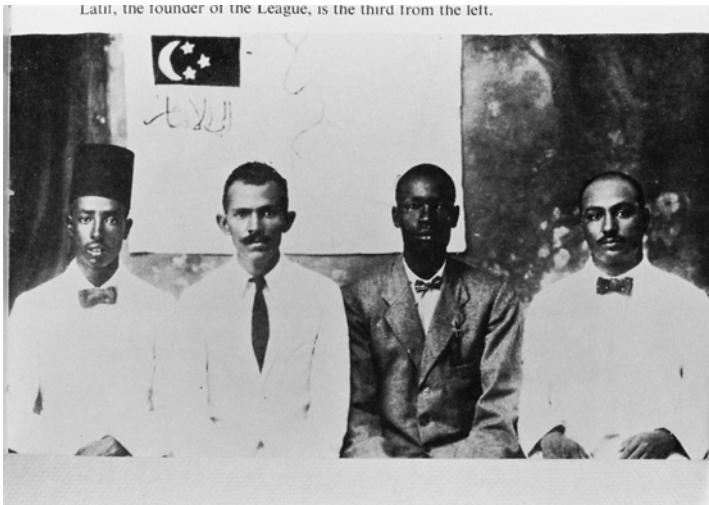


写真6 「白旗同盟」結成時に撮影された写真（右から二番目がアリー・アブド・アッ・ラティーフ。左端が盟友ウバイド・ハーッジ・アル・アミーン）P. M. Holt and M.W. Daly, *The History of the Sudan*, London: Weidenfeld and Nicolson, 1979より。